

「旌徳活人劍碑」 日置黙仙

原文

從四位勲二等陸軍軍醫總監醫學博士佐藤進君清國講和全權大臣李鴻章伯能傷痍を施治回復勢し免ら禮し名譽と伯の難問丹明答越與遍良礼し功績登波禪機乃妙用神力の感應とし亭長く後世傳ふべ記事奈りとて有志者相謀里天記念活人劍盤建設世ら禮たり茲に博士能夫人静子君令息昇君等妙典八卷を一字一石に書寫し其下尔埋蔵せしめ羅る實に明治二十七八年農役に戦死病歿志多る者能冤親平等供養乃為めにハ無上廻大功德なるべし登喜悅の餘聊其顛末を記春明治三十二年二月現董四十八世黙仙誌

活人劍建設幹旋從五位勲五等 河瀬秀治
同圖案及製造監督 前田香雪
同原型雕刻帝室技藝員從六位 高村光雲
同鑄工 藤井利延
同石工 宮 龜年

現代口語訳

從四位勲二等で陸軍軍醫總監醫學博士の佐藤進君が、清國講和全權大臣李鴻章伯のけがを治療し無事に快癒させた名譽と、伯の難問に明快な解答をした功績とは、まさしく禪機の妙用（禪僧が修行者の奥底に直接響くような短句を言うこと）、神力の感應（神の靈妙不可思議な力に触れること）とでも言えることで、長く後世に伝えるべきことであると考へ、有志者が相談し合い、この記念すべき活人劍は建設されたのである。

それに当たっては、博士の夫人の静子さんやご令息の昇君等が、法華經八卷の一字一文字を一つの石ごとに書き写し、その活人劍碑の下に埋められた。実に明治二十七八年の日清戦争で戦死病歿した人たちを、敵味方の区別なく平等に供養するためには、この上ない大きな善行となるにちがいないと、自分は喜びのあまり少しばかりその経緯を記した次第である。

明治三十二年二月、

現住職の可睡齋四十八世、日置黙仙が書き記した。

活人劍建設幹旋從五位勲五等 河瀬秀治
同圖案及製造監督 前田香雪
同原型雕刻帝室技藝員從六位 高村光雲
同鑄工 藤井利延
同石工 宮 龜年



副碑の上段が旌徳活人劍碑